

第2回 双葉町復興まちづくり委員会 生活再建部会 議事概要

■日時：平成24年11月26日（月）午後1時00分～午後2時45分

■場所：双葉町役場埼玉支所 4階家庭科室

■出席者：別紙座席表のとおり

■議事概要

1. 開会

2. 議事

(1) 「仮の町」に必要な機能について

資料2、3、4、5、6、7、8について事務局より説明後、質疑。委員の主な意見は、以下のとおり。

○放射線量や気候が一番大きな問題である。

○いかに多くの町民が仮の町に住んでくれるかという観点からすれば分散型である。長期間そこで生活せざるをえない現実からすれば、場所の選定は重要。

○先般福島県より全国の自治体に対して、福島県からの避難者の新規受入に係る年内終了を依頼する通達が発出されたが、福島県外に出るなという通達がどうして行われたのか、この本質を理解しないと、県外の分散型は現在避難している町民でしか進めなくなってしまう。

○一度仮設なり借上げなりに入ったら避難終了となり、色々な事情で引っ越しをしたくても、別の借上げへの変更は法律上できない。他方、引越しに伴う新たな家賃負担を東電への賠償請求で行っても、家賃支払いと賠償受取りとの間には数カ月単位のタイムラグがあるのが実態。

○仮の町に必要な都市機能について、最初から充実したものを全て求めるのではなく、町が充実、発展していくに従って諸機能を充実、発展させていくという発想が必要ではないか。

○「仮の町」では、まず、共同の作業場、共同の事務所など共同の施設を作ってスタートするという考え方もある。

○いつ帰れるのかの見通しもはっきりしない中で、仮の町の機能についても短期的ものと長期的なもので変わってくるのではないか。

○構造物や建築物を作る上で耐用年数を考えないといけないので、5年でいいものか、30年でいいものか、個人的には100年は帰還するのは無理だと考えているが、まず何年単位を想定するのかは必要。また、選定場所によって町民の集まり方は変わりうるし、生活再建をどの程度とするのかについても商店でも農家でもそれぞれ異なるため、ある程度このあたりまで再建できるという見通し

が必要ではないか。

- 将来的に人口減少が避けられない中で、仮の町もそれを前提とした制度設計をすべきであり、無駄にならないような仮の町づくりを議論すべきではないか。
- 仮の町は 30～50 年は続くことを前提に議論する必要がある。仮の町に必要なものと言えば鎮守の森ではないか。心の拠り所にもなるし、行事等を通じて家族が自然と戻ってくるような環境につながる。
- 他の市町村では子供たちの引留めに奮闘し、学校を再開しても子供がなかなか集まらないのが現状。子供たちも避難先での生活に慣れてきている中で、数年後に仮の町に立派な学校を作ると言っている状況ではない。また、学校再開の見通しが立たない中で双葉郡の教員も他市町村へ流出しているのが現実であり、少人数でもいいので、町のシンボルとして一刻も早く学校再開のメッセージを町民に示すべき。
- 一刻も早く仮の町の拠点となりそうな場所で学校を立ち上げないと、双葉という名前の学校がなくなり、又、双葉で働いてくれる教員がいなくなってしまう。
- 仮の町について全てを満足させることは不可能なので、何を優先順位にすべきか議論すべきではないか。役場機能移転が動き出したこともあり、まずは役場機能を中心とした町づくりを考えるべきではないか。
- 消費者がいけないことには、商売は再開できない。とにかく 1 つの拠点をつくって、そこに人を集めていくような流れをつくることも必要ではないか。
- 町づくりの理想を追求するよりも、まずは仮の町の拠点を早く決めるべきではないか。そうすればどこに何を集中するか、分散するか否かの議論を進めることができると思われる。
- 集中型が理想なのは分かるが、受入自治体との軋轢が生じることを認識すべきあり、軋轢の少ない分散型で進めていくべきでないか。そのためにも仮の町の拠点の選定を議論すべきである。
- 場所の選定は重要だが、その前提として放射線量及び気候風土等に加えて仮の町の面積がどれくらい必要かの検討も必要であり、まずはそれらを決めた上で、受入先の了承を得た上で、次の段階として住宅、福祉施設等を議論してみてもどうか。
- 帰れない若しくは帰らないと判断した町民も念頭において、まずは分散型として仮の町の候補地となり得る拠点を県外（関東圏内）も含め数か所設定して、それから都市機能を肉付けしていったらどうか。
- 仮の町の住環境について、事務局から説明のあった災害公営住宅のイメージの中で、単に住む場所の提供だけでなく、そこで人が集まり交流できるスペース

を併設するというアイデアは、今後議論を進めていく上で良い示唆を与えてくれていると思う。

- 既に町民の中にも自立志向が定着してきている中で、集中型では町民にとってそこまでの移動に負荷がかかるため、現実的には分散型にならざるをえないのではないか。
- 7000人の町民を満足させる集中型は現実的ではないということも直視すべき。
- 仮の町の形態について、集中型ではなくて役場を中心とした拠点型とするとか、分散型の中でもどこかに大きな分散の固まりを必要とする等委員の間でも色々な想いがあり、現段階では様々な意見を出して互いの理解を深めることが重要である。
- 本部会委員から提出のあった分散型の仮の町のイメージ図は良いと思う。各拠点の中にも役場・福祉施設・学校等を有する大きな拠点地があり、そこから枝分かれする形で役場支所・コミュニティ機能を有するサブ拠点を数か所設置し、それぞれが結ばれているというアイデアは多くの委員の意見をまとめた形になっている。
- 仮の町に神社が必要という他の委員の指摘に関して、町民の心の拠り所という面からも賛成である。
- 祭り事は人々の心を結び付けるものであり、宗教施設は行政が口を出せない部分ではあるが、住民の希望で実現していくことも一案である。
- 時間がない中で、仮の町の場所の例示を挙げて議論しないと議論がいつまで経ってもまとまらないのではないか。
- この委員会では来年3月迄にとりまとめを行い、それを踏まえて町長と議会が協議して決めるのであって、ここで仮の町の場所の結論を出しても意味がない。
- 仮の町の場所については、近く住民意向調査を実施する予定であり、その中で場所に関する町民の意向も把握できる。今の段階では議論を深めることが必要であり、具体的な場所を言うところを否定することにもつながりかねないため、早めに結論を出すのは控えた方がいいのではないか。
- 場所の選定よりも、拠点設定の規模や放射線量の程度等町独自の基準を決めて町民に示すという方法もあるのではないか。
- 仮の町の基準については、それを解決したとの前提の下で集中型・分散型の議論をしていかないと、また議論が最初に戻ってしまうのではないか。
- 例えば、放射線量の基準についても我々が簡単に決め切れるものではないため、まずは仮の町の様々な課題に関して幅を持った議論をすることによって、最終的に結論を導いていくようにすればよいと思われる。

3. その他

4. 閉会

第2回生活再建部会座席表

(敬称略)

渡邊 高野
ゆかり 重紘

1 日時 平成24年11月26日(月)

13:00~14:45

2 場所 双葉町埼玉支所 4階家庭科室

田中 清一郎		三井所 清典	駒田
大橋 庸一		藤田 博司	事務局 吉野
			松橋
井上 六郎		中村 希雄	
末永 幸弘		鶴沼 友恵	事務局
荒木 幸子		井上 一芳	
山下 正夫		高野 憲一	
大沼 武		竹本 良一	